

に分乗、スフバートルへ、そこからウランウンデ  
經由シベリア鉄道に乗換え、一面の雪原の中をナ  
ホトカへ向ったのである。

そして十一月ナホトカ着、人民裁判の洗礼を受  
け、ようやく復員船（北鮮丸）に乗船、十一月十  
五日ナホトカ出航、十一月十八日函館港上陸、故  
国日本の土を踏む。感無量なり。

茫々<sup>ぼうぼう</sup>六十有余年の歳月を超えて今シベリアを思  
うとき、あの辛酸を極めた強制労働の明け暮れも、  
酷寒の荒野にあつてただひたすら帰国の日を一縷<sup>いちろう</sup>  
の望みに託して生きてきた収容所での生活も、年  
月の経過と共に次第に記憶も薄れ、今正に風化し  
ようとしている。

戦後六十二年、繁栄を極める日本にあつて今の  
私共の生活をみる時、シベリアで生きてゆく極限  
の中で望郷の念に駆られつつ、異境の地に逝った  
戦友の無念さを思うと、うたた断腸の思いから  
れるのを禁じ得ない。

還らざる友のご冥福を心から祈るのみです。

## シベリア抑留記

神奈川県 山田 貞 治

本籍地 群馬県山田郡大間々町字桐原

生年月日 大正十三（一九二四）年九月十四日生

学 歴 芝浦高等工学校附属工科学学校機械科

卒業

職 歴 昭和十六年十月三日 国鉄大井工場

工機職場就職 横浜機械区配属

家 業 父（国鉄職員）母 第二人（就職）

妹 弟（学生）

昭和二十（一九四五）年三月七日入営者は群馬  
県の高崎駅に午後一時に集合し、午後二時の列車  
に乗車し、上野駅にて下車。案内人の指示で東京  
駅へと向かう。東京駅は夜行列車に乗車するため  
列から離れないように待合室にて待機。東海道線  
急行列車大阪行、午後九時に乗車し大阪駅着午前  
五時で、下関駅列車は同ホームの左側に待ち受け

ていた列車に乗換えと共に下関行きの列車は発車。数時間で広島を通過し下関に到着。

食事後一夜明けて下関港から釜山港へと渡り、時計を見ると午後五時を過ぎていた。案内人と共に会議室に案内され食事を摂り、夜、釜山港駅を午後九時出発まで休み、午後九時三十分の列車にて京城（ソウル）経由で牡丹江へと出発。

午前七時五十分に牡丹江駅に到着、朝食後連隊からの担当者が迎えに来ることになっている。待つこと十分で担当者が見え、営門にて各隊ごとに配属され、各連隊員となった。

二カ月が過ぎ、一期の教育も終わろうとしているおり、鉄四が海城へ、とのこと。我々初年兵は一期の検閲を終わり、七月二日ハルピンの三果樹鉄道工場へ派遣となり、三日の朝方、飛行機の爆弾の音と共に外へ出て見れば昼間のように明るく、ソ連の飛行機がハルピン方面へと飛び去って行った。その間は昼間のように明るく、朝食後工場へ出勤すると、ハルピンの鉄道隊は本日で終わり。

我が隊からの連絡で本日帰営されたしとの連絡があり、午後十時の列車で帰営することとした。帰営をしたが、中隊、班には誰もおらず、各班には我々の教育隊三人しかおらず、本隊はこの作戦に出動されたか何もわからない。朝の食事は何もなため連隊の酒保売店には誰もおらず机下方にパンがあり、それを食事替りにと持ち帰り、誰か来るといけないのでその場で朝食替りにした。そのうち材料所から作戦に行くので出られるかとのこと。参加することとした。

しかし駅本線にいる列車という時の話と違った話になり、牡丹江の近くに列車を停めて我々三人を下車させて後の作戦隊が来るとのこと。下車させられ出発してしまい、我々三人はなんのこともなくその日は牡丹江付近にて一夜を明かし、どこへ行くのか分からず午前十一時まで待ち、何の連絡もないので三人で駅方面へと歩き、一中隊の方と会い話を聞き、二中隊は橋の所にいることが分かり、行って話をしたら、今までの話で分かり、明

日の出発順の編成作業に参加することと列車の準備で明日の出発を待つことになった。明日は朝早く横道河子まで運転するので同列車に乗車することとなった。

昨日準備した列車に機関車二両で、無貨車一両、貨車一両で出発し、ソ連の飛行機が気になるとのこととお互いに十分注意しつつ出発しなければならぬと言っていたところ、午前八時に出発したが次の駅にてソ連軍の飛行機が気になるとの事でお互いが十分注意しつつ出発しなければならぬと言っていた。

翌日午前八時に出発したところ、次の駅にてソ連軍の飛行機による空襲が始まり、全員下車し草叢又は空家に避難し、一時間後に飛行機は帰着し牡丹江方面へ引き上げて行った。

我が列車は再度横道河子へと引き返して行った。二日たち、再度のソ連側の空襲が行われ、また家のない広場へ、草叢へと空襲が行われ、一人が戦死し草叢のため機関車一両運転不能となり、ソ連

方面へと引き上げた。我々の戦場を荒らされた後は我が隊のみで、早急に横道河子へと列車を運転し横道河子に到着。日が暮れて一夜明け、大隊本部に報告と戦死者の報告を行い、大隊長は尊い命をおとした中隊長をはじめ昨日戦死された方の仮葬儀を行い、冥福を祈った。さらにその後、大隊長からの連絡事項にて戦争は終わった。これから大切な時に当たり、各自身体は十分大切にこの話で、各人は今持参している武器等は指定されている所へ集積する事。軍人は戦争が終わりを告げたら、これからは大切な時にあたり、各身体は自分の事であるから十分注意されたい。なお、他人の荷物には手を出さない事とし、今から牡丹江方面へと出発する。鉄道隊は中間より前に入り行軍が始まり、二日間行軍し拉古の馬頭庫へ九月十日に入所し、食事等は三五〇グラムの黒パン一切れで、毎日昼に支給されるが、ここは馬頭庫の宿舎の馬の食料として工作している馬鈴薯で多く作られており、毎日食料として空腹を満たした。二カ

月経ち、我が中隊は再度牡丹江經由で三日間の行軍で、その間一日の食事は黒パン三五〇グラム一個で行軍。その間、行軍中畑からトウモロコシを取り、それを食事代わりとした。夕食は分らない草を湯に入れて食事代わりとし、綏芬河にて一泊し、翌日大型貨物自動車に乗車し、到着した所はウオロシロフ駅から引込線の貨物駅へ軍の倉庫、飲物軍用品庫、食料品、被服類、その他各種下着類、天幕十五張置いてあり、鉄道隊に十二張使用し、毎日倉庫にて作業をした。

いつとき満州から一列車到着したことがある。約一週間に三列車の荷降ろし作業で何事もなく終わり、再度自動車にてハバロフスク郊外に抑留者が各所から集合し、一週間後に我が鉄道隊十人は再度ハバロフスク構内貨物駅にて貨車に乗車し、北方面へと列車に乗車、発車と共にその貨車の中で我々を何と考えている。列車連結器を切る事は出来るが、後に問題が起きるので中止として乗車する事五時間、中間駅で夕食。黒パン一切れで話

しつつ、大きな駅の広場に到着。貨車から降ろされた時は寒さが身にしみた。そのうち雪のような白い雨降りになりそうになった。待つ事二十分自動車に来て十人ごとに乗車し到着は兵舎で、元軍人の兵舎と思い、正門から入って一号室にて待つこととなり入舎して午前十一時となった時は我々の一号車に入り待つ事三時間で後が入って来ない。そのうち他の兵隊が入居して来た。二日でその兵舎は満員となり、そのうち入居した者から暖房がない話で各舎共大問題となり、担当者呼び、暖房がない事はどのような事かと聞いたところ、担当者は寝台の頭の下にコードがあり、そのコードに電気がこないのではないかと行って、そのスイッチを入れたところ電気が通り暖房となり各々安心となり、入所者に知らせる事となった。